

子どもの「新しい荒れ」と教育現場の要求

倉本 頼一

「教室から飛び出し たち歩き けんか 大きな声でのおしゃべり、授業妨害、給食のパンやおかずの投げ合い、ジャム、マーガリンの塗りたくりなど、6～7人の子どもの行動で 教室は 常に騒然としていました。

なぜこんなに子どもの心は荒れてしまっているのか、注意しても『おればっかり』と反発し、いつになったら分かってもらえるのか、考えたら落ち込んでしまう毎日でした。……」(京都教育センター年報10号P5)

これは、京都教育センター(京教組、学者教育研究者の組織)の研究集会で「なぜ起こる小学校教育崩壊」のテーマで報告された内容の一部である。現在、全国の小学校の現場では、子どもの「新しい荒れ」とよばれる困難な状況が広がり「学級崩壊」状況で、正常な授業がむつかしくなっている学級が増えている。

それは、今日の系統性、科学性、子どもの発達段階を大切にしない指導要領が、多すぎる教育内容を詰め込ませる所に大きな原因がある。さらにそれに対して子どもの現状を大切にしたい創造的な教育内容を集団的に実践しようとしても、管理強化で自主的、科学的な教材選定、創意ある授業を認めず、指導要領と指導書通りの週案作成と実施を命令する教育体制全体に根本的な原因がある。

これらの学校教育の管理強化と共に不毛な受験競争のゆがみが、頂点にたっている。

以上のような「教育内容の多さ、系統性のなさ」「教師の自主的創造的な実践の抑圧」「不毛な受験競争」「学校管理の強化」の他に「子ども

の新しい荒れ」を生み出す原因として「家庭の人間関係の変化」が現場から指摘されている。先の京都の教育センターの研究会の報告の中でも次のような問題がまとめられている。

「討論では、子どもの荒れの背景としての家庭での体罰が問題となりました。今日家庭での父母による暴力は一般化しているが、子どもが傷つく度合いは、かつてと違い、より大きいものがあります。『人の悲しみや苦しみが、自分にとっては快感となる』といった傾向は教師、学校の取り組みを越えるほど強いものではないかという意見も出されました。」(京都教育センター年報 10号P5)

これは個々の親が全て悪いというのではなくて現代日本の家庭・父母が「子どもが勉強できないのは父母が悪い」「非行に走ったり登校拒否したり、問題行動になる」のは「全て母親の育て方だ」等、社会的に責められ、攻撃にさらされている親、とりわけ母親がその責め、攻撃を知らず知らずに自分の子どもに向けている所にある。その形は目に見える暴力から、暴力はないが精神的に追いこむものまで、いろんな形になっている。「子どもの為」「将来の為」という「善意」で「塾」と「ならいごと」により、子どもに遊ぶ時間をなくしてしまう状況は、「虐待」とははっきり言えなくても、子どもに息苦しい生活を送らせ、日常的に「いらつく」「むかつく」「キレル」と叫ぶ子どもを生み出している。

このように考えると、特殊で特異な事件の少年と考えられているあの神戸の連続殺人事件のA少年が3年生終りに書いたといわれる文は、

特集・頻発する年少者犯罪と日本の労働者・国民

A少年が現代の子どもの「新しい荒れ」と無関係でないことがわかってくる。

『まかいの大魔王』

お母さんは、やさしいときあまりないけど、しゅくだいをわすれたり、ゆうことをきかなかったりすると、あたまから2本のつのがはえてきて、ふとんたたきをもって、目をひからせて、空がくらくなって、かみなりがびび一つとおちる。そして、ひっさつわざの『百たたき』がでます。お母さんは、えんま大王でも手がだせない。まかいの大魔王です」(A少年3年生作文)

小学校の低・中学年くらいの子どもが、お母さんのことを「おにババア」とか書いたり、お母さんの絵に角をはやすことは、よくあることだ。しかし、同じ3年生の時「お母さんなしで、生きてきた犬」という作文で「ぼくもサスケ(犬)と同じで、お母さんなしで生きてきた」という内容の作文を合わせて考えると、これは単なる冗談や誇張でなく「百たたき」に近いものがあつたことが想像できる。ましてやその頃(3年生)『子どもがおかしい』ということで医者にかかったところ「親のしつけがきびしくて、軽いノイローゼにかかっている」といわれたと伝えられていることを共に考えると、A少年がこのころから、少しずつ病んでいたと思われる。

今日、全国的に広まっている「子どもの新しい荒れ」には、次のような特徴がある。

- 1 授業に集中できず、私語はもちろん、席の離れた子ども同志、大声で話をし、注意すると「うるさい」「クソババー」と反抗し、教室を飛び出す、止めると暴力をふるうこともある。そんな子が数人以上になり、他の子がそれを面白がって同調すると授業ができなくなる。テストも丸めて捨てたり授業中に物を投げ、時には教師に投げつける。
- 2 朝から何をやる気力もなく、ぐだーとしていて、注意したり批判されると「うるさいじゃー」「ムカつくー」とあばれ机、椅子を

けったり、まわりのものを投げたり、暴力をふるってパニックになる。

- 3 今まで外から見ると「友達・仲間」と思われていた子ども同志が、実は互いに信頼してなくて、ちょっとしたことで「死ぬ」「殺したる」と驚くような暴力・攻撃的になる。
- 4 茶髪、ピアス、マニキュア、口紅、刺青シールなどして学校にくる。

などなど、今までの小学校現場では、考えられないような状況が、全国の小学校現場に広がり1校に1つや2つの「学校崩壊」「授業不成立」の学級があることが、珍しくない。

こんな子どもと学校現場の中で「良心的な教師」であればあるほど、その指導に悩んでいる。「新しい荒れ」の原因を「教師の指導の力量」と攻撃を受けたりすると、自分を責めて病気になってしまう教師も増えている。

京都市のある支部の教文部が「小学校高学年問題アンケート」を実施し「高学年問題検討委員会」で、次のようなまとめをしている。

「小学校高学年指導の困難性を解決するために何が必要かを聞いた。やはり1日も早く専科制を導入し、高学年担任の負担を軽減することが大切であり、それによって子どもにもよい影響が出ることが予想できる。さらに学級定員が削減されれば、成績評価にかかる時間、生活指導にかかる時間などは、かなり解消されるであろう」

つい2、3年前は「高学年が荒れている」「高学年がしんどい」といわれていたのが、現代では登校拒否、登校しぶり、いじめ、問題行動の多発の中で、低学年、中学年の指導も困難なことが増え、学級定数減、教員定数増、専科教員配置、持ち時間(授業)軽減は、現場教師の切実な要求である。少年犯罪の増加の中で、今こそ一人一人の子どもの声、本音を大切にした教育をすすめる為、父母、住民と力を合わせて教育要求実現をめざしすすんでいかなくてはならない。(京都・城陽市古川小教諭)